

婦人と子ども

大正六年九月五日
第十七卷第九號

弘前の栗の實

(此の一文は東北旅行中の久留島氏より倉橋幹事にあてられたものです)

青森の海岸より 久留島 武彦

節は立秋に入りましたが暑さはまだくこれからだぞといひさうな日の色を見せて居ります。

今年には廣島縣の郡部から始めて、神戸、大阪、岡崎と各地の子供の會やら先生方の講習會やらにまはりまして、更に秋田縣にうつり、毛馬内といふ名前からして既にアイヌ語系の著しい昔の蝦夷地の村落から大館、鷹ノ巣とうつつて、弘前市に出ましたのは一昨十三日の午後でした。

こゝでは弘前青森聯合の保姆會に何か話せと云ふ事でしたので、其の會合に臨んで見ると、大分

小學校の先生方や市の學務課の方や土地の有志なども見へて居たので

幼稚園は小學校入學の豫備門でせうかと云つたやうな趣旨のお話を致しました。聊か脱線の氣味もありましたが、斯云ふ時こそと思つたので、大に保育事業の重大なる立場と保姆の位置の尊く高きものであることを高調して、ことに現時の新舊日本の過渡期に於て家庭と社會に對する幼稚園の使命を説いて見ました。

私の話はどんな印象を參會者に與へたかは分り

ませぬが、私は此の席で頗る有益な、而して趣味深きお話を參會者の一人で土地の名望家で、醫師で、代議士で而して幼稚園を經營して居られる伊東重翁から聴く事の出來たのは非常に仕合せでありました。

其の話は栗の實と園兒

とでも題するやうなお話でした。

此の栗の實のなる栗の樹は、伊東翁が園長である養生幼稚園の後庭に茂つて居るので御座ります。私もあまり興深きお話であつたので、出發の前車夫を急がせて一寸のぞいて來ましたが、一本は三抱へもあらうと思ふ幹の大きさで、その高さは五六丈もありませうか、一本はこれよりも少し小さい幹ですが、二抱へばかりと見へました、そして木の高さは似たやうなものでした。

此の二本の栗の樹は、五六間はなれて立て居るので、二百坪ばかりの運動場には誠に適當な日除けになつて現に此の下では私が見た時に、七八人

の多分同窓生でせう、ジャンケンをやつて遊んで居ました。

始め伊東翁が此の屋敷を幼稚園にと譲受けた時先づ眼にとまつたのは此の二本の栗の樹でした、イガ／＼の大きなものが、無心に遊んで居る園兒の頭の上に落ちて來たならどんなに困るだらうと思つた時截て了はふと考へたのですが、さてよ、其のイガ／＼の落る時は一年の内僅に一月位の間でその他には日除けにもなれば、庭の趣きもつくる、ことに栗の實はお伽の界世に無縁故では無い。此の儘に残して置うと、伐る事は止めになりました、ところが秋の末になると、栗の實がホロ／＼ホロ／＼とこぼれる、園兒の喜びは、たいしたものですが、ともすると、生でかむ者がある、ポケットに入れてそつと拾つてかへるものがある、伊東翁はこれを見ると、これは此の間に悪い癖をつけるやうな事になるかも知れぬ。幸ひ二本の栗の實は大きな桶に餘るほど落ちる、これを園で茹て、園兒

と同窓生とに食べさせたら喜びもしやうし、楽しみにもなり、在園兒と卒業生とを結付るよすがともなると斯う思付かれると、それから秋が來て栗の實が落ちるやうになりますと、伊東翁は卒業生を呼んで來てイガをむかせる、園兒はその中の實を拾集める、斯して毎日寄せて置いては、これをゆでて子供達共々一日楽しく親睦會を開くのさうです。左様なると面白いもので、今迄そつと一つ二つ拾つて持て還つた子供が此の一日の樂しみの爲に、持て還らなくなつて見つけたゞけは先生、こゝにもありました、まだありました」と先生に渡すやうになりましたと云ふ。

伊東老園長は此の話を私にして聞かせながら、いかにも嬉し氣に、背中をまろくして、私の顔のぞき込みながら、「楽しいものですよ」と云ひ足されました。

私は、このお話を聽て居る内に、いつか私が卒業生にもなり、園兒にもなつて、栗のイガをむい

て居るやうな、寄せて居るやうな心持になつたのでした。子供達の心もちになつたならどんなに嬉しい一日でせう。

尙聽けば此の養生幼稚園の保育室になつて居る古い建物は、嘉永三年の春吉田松蔭先生が北邊の沿海防備の實際を視察せん爲、此の津輕領に入られた時、時の儒者で園長と同じ伊東姓の方が此の家に住で居られたので、其の人を訪ねて會見された座敷であるさうです。

此の由緒ある家に、此の心ある園長の膝の元に集ひて、籠に盛られたゆで栗をたべながら、一日楽しく過す子供等はどんなに仕合せかと思ひました。

此の園に働く保母諸君は、どんなに嬉しいでせう。

大分久しく御沙汰をしましたので申譯かたぐ此の美しい話をお送り致します。私はこれから北海道と樺太とを見て、東京の子供の顔を見るのは九月の末頃でせう。

左様なら、お大事に。